

防災を意識した業務改善
～ 防災教育から「事務をつかさどる」事務職員への変革 ～

多可町立加美中学校
学校副主幹 溝垣 隆宏

1 取組の内容・方法

私は、平成16年度に兵庫県教育委員会より震災・学校支援チームEARTHの委嘱を受け、早いもので13年が経過した。私たちは災害があれば被災地へ赴き、学校の早期再開を目指して活動することはもちろんのこと、阪神・淡路大震災を語り伝えることが責務である。一方で学校教育法が変わり、事務職員の職務が「事務に従事する」から「事務をつかさどる」になり、事務職員も変革の時期にきた。私は、「事務をつかさどる」ことへのきっかけを「防災」と位置づけ、事務職員の防災への関わりについてきっかけをつかむため、講義中心の講話から実態に即したワークショップを取り入れた。これらを実践する中で、業務改善を進めるには、防災の視点が必要であることに気づいた。

(1) 防災士会との連携（避難所運営ゲームHUGとの出会い）

防災士が各地で積極的に様々な取組をされていることを知り、会合へ招かれた。ここで、防災士の取組の一つである「避難所運営ゲームHUG」の取組を知った。避難所運営ゲームとはHUGは、H(hinanzyo 避難所)、U(unei 運営)、G(game ゲーム)の略称で、静岡県が開発して普及している。この手法を習得するため、防災士会の研修会に参加し、研修を積んだ。

(2) 各地の防災研修会への参加

ア 寝屋川市第四中学校区教職員研修会

寝屋川市第四中学校区の教職員90名を対象にワークショップを行う。東南海地震の発生が予測されるため、教職員の災害に対する意識高揚を図った。阪神・淡路大震災の時に教職員が陥ったジレンマにどう対応するかについてグループワークを行った。グループ発表に対し、奥尻島地震から阪神・淡路大震災当時の対応状況、救援物資を保管することにかかった経費、教職員の対応状況などを説明した。

イ 高知市教育研究会学校事務部会研修会

高知市は南海トラフ地震により、甚大な被害を受けると予測されており、津波に関する研修を積まれている。高知市事務職員100名が対象であったため、講義形式で講話を行った。高知市内の数校を抽出し、その学校をモデルに、震災発生時のジレンマについてグループワークを行った。

ウ 三重県桑名郡市小中学校事務研究会防災教育研修会

桑名郡市の事務職員を対象とした研修会において、ワークショップを行った。ワークシートを縦に割り、行政が対応するもの、学校が対応するもの、右端に事務職員が対応することの欄を設け、付箋により対応状況をまとめた。桑名郡市事務研修会では、事務職員対応の防災マニュアルづくりに取り組んでおられ、このワークショップのまとめの結果を受けて、引き続き、完成に向けて取り組まれて

いる。基本は学校の防災マニュアルであること、事務職員版の作成は、災害時の手続き、サービス関係、給与関係など区分を明確にする必要性を伝えた。

エ 県立教育研修所事務職員経験者研修 HUG

学校の危機管理対応の一つが「防災」である。危機管理の対応の詳細について1部で講義を行い、2部では防災ワークショップ（HUG）を行っている。1グループがおおよそ6人で開始するワークショップで、読み手が一人、残りの5人は災害発生直後、出勤した職員という想定の下、300人以上の地域住民が学校へ押し寄せることを想定して読み手は次から次へと休むことなくカードを読み上げ、グループ内の他の班員へカードを渡す。カードには、避難所での避難者誘導に始まり、マスコミ対応、救援物資対応、家族の特徴などが記されており、カードをもらった他の班員は即座に対応しないと、次から次へと押し寄せる避難者に対応できなくなる。あえて緊迫した状況下でどう対応するかの紙上訓練である。全員を誘導し、終わった後、各グループから対応で困ったことなどを発表させ、災害時の事務職員の果たす役割について再確認した。

オ 地域での活動

平成23年度～平成26年度の4年間、私は地元集落の区長を拝命し、その間、予想しなかった災害に2度見舞われた。多可町にこれまで経験したことのない台風による豪雨のため、幹線道路が2箇所です断され集落が一時孤立しかけた。また、土砂崩れの前兆が現れたため、住民を小学校や町の施設へ避難させた。また、避難時に逃げ遅れた独居老人も無事に救出できた。当時中学生（加美中学校）であった私の集落の生徒が、このときの消防団や集落の様子を作文で発表してくれたことは、EARTH員、集落の一員であった私以下集落住民に感動と勇気を与えてくれた。EARTHで学んだ迅速な状況判断、緊迫した状況の中であらゆる方々の意見を聞き、避難の判断できたことや一人のけが人も出すことなく避難させることが出来たことは大きく、地域の防災訓練に向くことにより、様々な防災上の問題点を見ることができた。

(熊本派遣報告会の様子)

(3) 事務職員としての知識を防災マニュアルへ

校長の指示により、防災担当教員からの依頼を受け、事務職員として防災マニュアルの改定作業に加わった。通勤届をもとに、職員ごとに学校に到着できる距離から時間を割り出し、防災マニュアルに記載した。



(4) 防災を意識した業務改善（あたりまえの事務処理）

いつ災害が起こるかわからない、いつ講義の依頼があるかもわからない。このような状況下で私が考えたことはそう難しくはなかった。正確で迅速な事務処理を行うための「業務改善」である。今、「業務改善」という言葉を多く聞くが、「危機管理（防災）」を意識した業務改善でなければならないのである。日々煩雑になる給与・サービス・旅費などの効率的な事務処理を痛感している。具体的な取組は次のとおりである。

ア 机上、机の引き出しの整理

事務処理の基本。机の引き出しの役割を決め、手前の真ん中の引き出しは一時的な書類の保管スペース。右端の上は必要最低限の文具。右端の真ん中はパソコンと処理中の書類を置くスペース。一日の終了時に次の日の仕事の整理を行い、給与、財務処理など漏れ落ちがないようにした。事務処理のミスを防ぐため、机の上には余計な書類は一切置かないことを徹底している。

イ 旅行命令簿・復命書の個別フォルダー

これまでの簿冊形式を改め、個別フォルダー形式にすることにより回転が速くなった。同時に、見た目の書類もきれいになり、事務支援等で相手に与える印象も良い。書類をきれいに揃え、帳簿をきれいに保つことは事務の基本である。

ウ 諸帳簿の毎日の点検

まとめて行うから間違いが起こる。毎日点検出来るように習慣づけを行った。

エ 旅費請求書の随時作成

個別フォルダーと連動させ、復命が確認されるとすぐに作成し、保管しておくなど、校長決裁前にまとめて入力は絶対に避けるようにした。また、万が一の誤りに、承認期間内で対応するために、特別な事情を除き、承認期間初日に校長決裁をもらうよう配慮した。

オ 学年会計の様式統一（学校徴収金処理）

学年会計様式を統一し、保護者が同じ会計報告を目にすることが出来るようになった。また、学年会計の決裁時、同じ学年会計の書類と同じ通帳、同じ計算方法であるため、事務、教頭、校長の決裁がスムーズになった。また、学校徴収金に対する教員の意識が変わった。

(5) 多可郡事務研修会の活性化

郡内に小中8校しかない事務研修会をどのように活性化するのが課題であるが、「業務改善」を把握しきれていない事務職員が多い。前述の「防災を意識した業務改善」について、事務研修会での情報交換の場で伝えることにしている。本年度から2校ずつではあるが、会場校の事務処理の執務環境を見るとともに、問題点を見だし、全員で情報共有し、問題点を解決できるよう活動を続けている。この中に、特に危機管理を意識した事務処理についても同時に考えるよう配慮した。また、本年度は業務改善事務職員側から見た学校について講話をいただき、作成していただいた各種ファイルを活用し定着させていくことを確認した。

2 取組の成果

(1) 「事務をつかさどる」きっかけづくりとして

「防災」に関わることで、事務職員であっても小学校の教壇に立つことや、指導案に触れることも出来た。これを良い機会と捉え、日々の事務処理の糧としたい。さらに、私は、講義について壁に当たった時、必ず校長に助言を求めた。小学校ではどのような手法で訴えたら良いのか、また、学校再開に向けての学校の動きの確認など様々な指導をいただいた。同じ事務職員のEARTH員にも助言を求め、事務職員と防災についての指導を仰いだ。また、県内外の事務研究会から防災についての講話やワークショップの依頼が増え、防災における事務職員の役割が全国的に大きくなっている

ことがわかった。

(2) 避難所運営ゲーム HUG の普及

講義で伝えることも大切なことであるが、「体感する」ことを目的にワークショップを行えたことは大きい。例えば学校に6人しか職員が出勤できない場合に、おおよそ300人のあらゆる境遇の避難者を体育館、解放した教室等へ効率よく誘導し、外部の対応などあらゆる事象に対応できるか、あえて緊迫した状況を作り、避難誘導等を体感してもらうことができた。県立教育研修所の事務職員経験者研修の一コマとして研修に入れて頂くことができ、事務職員からは好評を得ることができた。この中でも、「業務改善」についても触れることが出来、事務職員にも防災への取組のきっかけを与えることができた。

(3) 防災を意識した業務改善の効果

防災へ取り組むという意識の下に事務処理を日々行っていると、迅速かつ的確に事務処理しなければ両立は困難であると気づいた。防災をはじめとする危機管理に対応すべく、事務処理は迅速に処理しておかなければならない。派遣により事務が対応できないということは絶対に避けなければならない。防災に取り組むようになり、それと平行して旅行命令簿等帳簿の見直し、学年会計様式の統一化、旅費請求から校長決裁までの事務の流れの見直し、旅費請求書の作成タイミング等業務改善を行うことが出来た。この業務改善により、書類作成よりも書類点検の時間に多くの時間を割けるようになり、事務処理の誤りを格段に減らすことが出来た。

3 課題及び今後の取組の方向

(1) 災害を意識した業務改善

阪神・淡路大震災では、給与・旅費・サービスなどあらゆる事務処理も困難を極めた。このようなことから、普段より事務処理は期日より1週間前には提出できるような意識づけを求めたい。

(2) 誤りの少ない事務処理をめざして

多可町内でも財務会計を始めとして事務処理が全体に遅いのが現実である。「事務をつかさどる」ことへ向かっていくには、学校が共同して「事務処理」を点検するシステムづくりが急務だと考える。まずは、学校内での決裁処理の見直しを徹底させる。職員に決裁の意識付けを確実に言い、多可町内共同でのチェック体制の構築を進めたい。校内の文書の保存期限など、職員室内の文書のルールづくりも主導してきたい。

(3) 防災マニュアルへの関わり

私を始め、職員が防災マニュアルを目にする機会はきわめて少なく、職員間で情報を共有し、災害時には連携が図れるよう、どのように定着させるかが課題である。

(4) これからの事務職員

事務職員は最大の転換期を迎えている。これまで行ってきた給与、旅費、財務等については、学校で事務職員が処理しなくなる日も近いと言われている。また、「コミュニティスクール」という言葉も身近に聞かれるようになった。これからは地域との連絡調整を担い、学校の運営に積極的に係わっていかなければならない。

業務改善は何かを意識しないと前に進まないのが現状である。「防災」に押され必然的ではあるが業務改善を進めることが出来たことは今後の自信となる。